

PHD LETTER

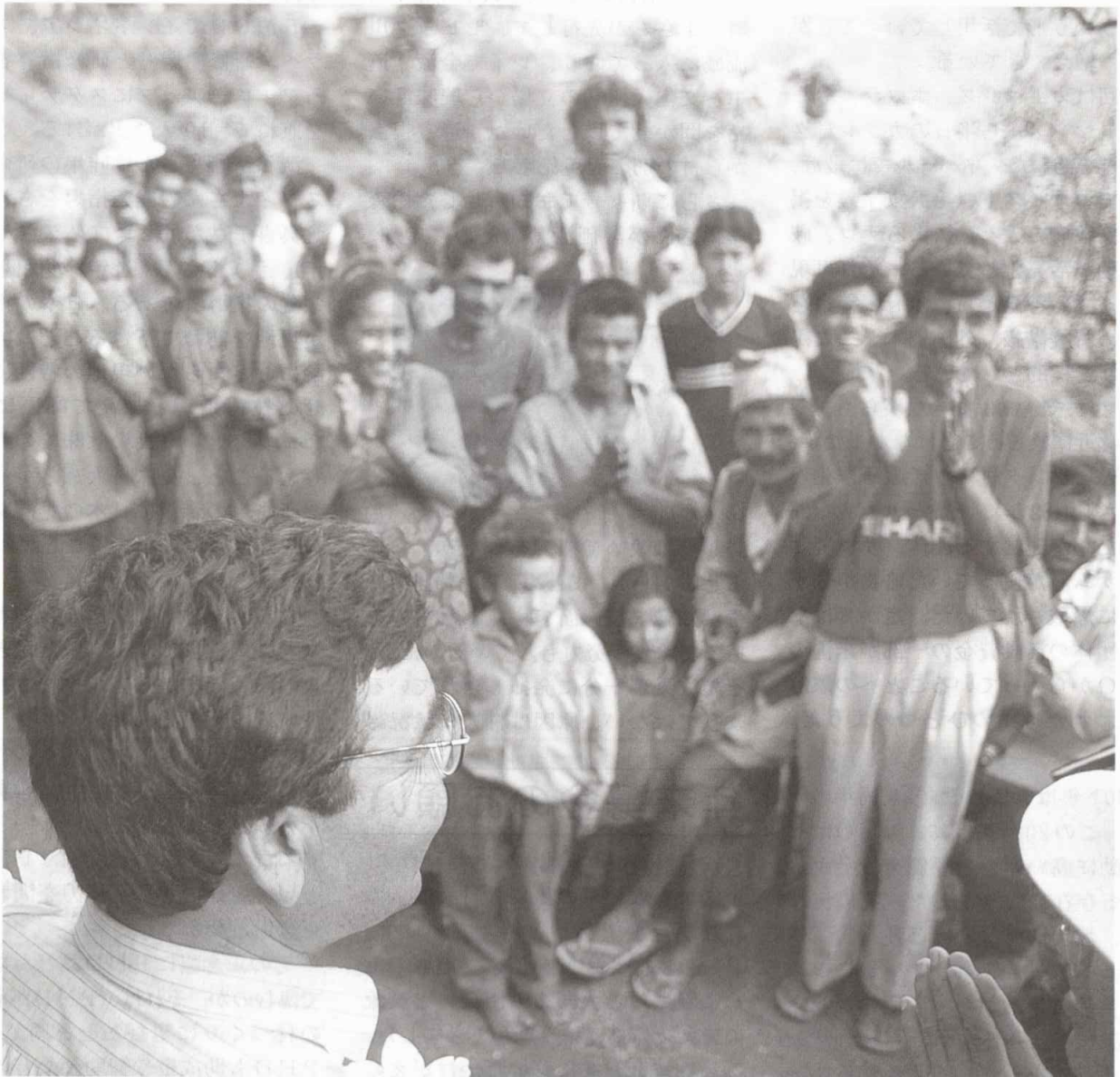
77

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 2000・12

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

- 夏のスタディツアー報告 3, 6P
- 研修生レポート 4 - 5P
- PHDで学ぶ人、続々! 7P

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
 編集人：藤野 達也
 住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
 元町アーバンライフ202
 TEL (078) 351-4892 FAX (078) 351-4867
 e-mail：phd@po.hyogo-iic.ne.jp
 定価：100円



ネパール、カブレ郡ガハテ村

この村に学校ができる。
 知らせをきいて村人が集まってきた。
 説明するのは第1期生PHD研修生の
 バラト・ビスタさん。
 「日本からもお手伝いがありますよ」との話に
 村人から拍手がおきた。

東西南北 問題解決 取組日記

総主事代行
藤野達也

8月X日

22人でネパールへ。フォローアップを兼ねたスタディツアーだ。これには兵庫県篠山市の教育委員会を通じて、中学生6人、教員、職員2人が市の研修事業として参加。PHDがもつアジア・南太平洋の村との関係をこういう形で活用していくことが最近、増えてきている。

今回はカトマンズ、ポカラ、そしてカトマンズから半日のカブレ郡クンタ村を訪ねた。ネパールでは最近、各地でマオイスト（毛沢東主義を掲げる反政府の人々）によるテロ、破壊活動が活発化している。それは現状に対する不満から、政府・警察をはじめ特権階級、外国資本とつながる人々を標的としている。

これまで、話は聞きながらも、それを身近に感じることはなかったが、なんと、クンタ村でウチの研修生バラトさん（82年）、ビドゥルさん（96年）たちが運営する団体、サマ・セワ・サムハが使っていた建物が3ヶ月前に爆破されていた。定かではないが団体の活動資金の一部が米国のNGOから入っていることへの誤解が狙われた理由のひとつのようだ。

警告的な意味が濃く、人命を狙ったものではなかったが、一見平和に映る村の生活の裏にあるものを強く意識せざるを得なかった。日本のマスメディアに登場すること以外にもアジア・南太平洋の各地に武力を伴った争いが存在している。

8月0日

研修生選考、フォローアップ、スタディツアーでパプア・ニューギニアへ。参加者は9人。うち大学の先生川崎一平さんが先行して、セピック川流域に入っており、レイで合流。道中、文化人類学の立場から興味深い話を聞かせていただいた。違う視点から村の別の面が見えてくる。

さらに前々号でお知らせした雨森孝悦さんが評価活動のために参加。



レルさん（90年）にインタビューする雨森さん（左）詳しくは改めて機会をつくり、お知らせしたいが、まとめれば「帰国研修生は知識・技術面ですぐれたものを持っており、努力もしているのだが、その成果が十分に発揮できているようではない。原因は村人の状況認

識の不十分さや、後方支援の不足等が考えられる。そのために村人をいかに起こすかの工夫、資金的支援の効果的活用の研究、研修生同士の連携強化等の検討が必要。」との指摘をいただいた。12月末には北タイに出かけていただく。客観的評価を今後の活動に活かしていきたい。選考は6人からシコンさん（女性・21才）を選んだ。

9月△日

5泊6日でインドネシア、スマトラへ。研修生選考と研修指導者によるフォローアップにスタディツアーを兼ねて、10人で出かける。

渋谷富喜男さんは昨年の研修生ダスウィルさんの農業指導をされ、佐倉真喜子さんはセニフィタさん（92年）、ラッドさん（94年）の保健衛生、栄養の指導者である。日本の指導者が現地を訪ねて下さることは、一般論にとどまらない現地の特性に合わせた技術指導と加えて師匠によるチェックという良い意味での緊張を与えること、更に村人たちが帰国した研修生の背後に日本の専門家の存在を知り、信頼をおくことにつながる。

お二人をはじめ、他の参加者にも選考の過程に加わっていただき、8人の候補の中からアルウィさん（男性・27才）を選んだ。

年末募金のお願い

そ、PHDが取り組んできた「モノ・金によらない草の根の人材育成」の意義が重要であると考えています。PHDは国や地域を越えて地域のためにがんばる人同士の出会いと交流の機会を作り、積み重ねてきました。これは皆様と共に築いたかけがえのない財産です。その財産をさらに発展させ、「共に生きる」社会を目指すPHDの存在意義はますます大きくなっているのではないのでしょうか。

しかし同時に、そうしたPHDの本質を大事にしつつ、急速に変化していく社会の動きに対応して、研修の取り組み方を変えていく必要性も感じています。20周年の節目に、こ

れまでの歩みを振り返り、次なる変革への第一歩と位置付けたいと考えています。そうした変化はPHDにとって組織の資質と体力を問われる正念場となるでしょう。

その正念場にPHDはどんな姿勢で臨むのか。それは、PHDが研修生の村づくりに望むことと同じです。PHDも助成金や補助金などの「外からの」財源に頼らず、皆様おひとりおひとりの分かちあいをこつこつと「積み上げる」ことで活動を続けたいと切に思っています。

アジア・南太平洋の草の根の地道な取り組みを、21世紀にも続けていくために、皆様からのご支援を頂戴したく、今年も年末募金にご理解とご支援をお願いいたします。

夏のスタディツアー報告

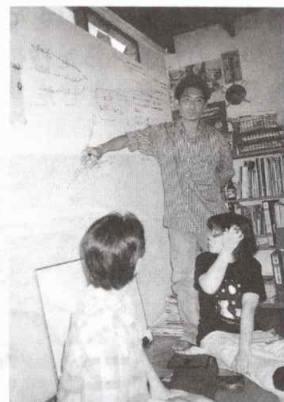
今年は7月から9月にかけて4つのスタディツアーを行いました。参加メンバーのレポートからいくつかを抜粋してご紹介します。

第17回タイ 7.22～7.29

スラム住民のヤル気を支援

サンコムさん（89年）の案内で彼の働くPOP（People Organization for Participation）の事務所を訪れる。POPの歴史、役割、活動、今後について話を聞いた後、スラムを見学する。

それはバンコク市内の国鉄の線路沿いにあった。沼地のようなところに建っている家もあって、衛生的にも問題がある。線路沿いのスラムに1,000世帯5,000人がいるそうだ。このあたりには50～60年前から住んでいるという。政府に対しての憤りも感じるが、住民が自分たちや子供たちのことをもっと考え、知識を持ち



問題に対して立ち上がるべきだ。地道な活動ではあるかもしれないけれどPOPと住民がつながりを持ち、協力して欲しい。

第11回ネパール8.6～8.13

チップをあげようか

迷ったけどあげなかった

ネパールが直していかなければと思ったこと。それはストリートチルドレンだ。彼らはお金がないために学校にも行けない上、食べることもままならないためゴミから使えるものを探して売ったり、観光客にお金をねだったりしている。僕も彼らに会った。僕と一緒にいた人たちが日本人とわかったらしく、「ジャパニーズ、チップ、プリーズ」と言ってきた。あげたい気持ちをこらえて

「ノー」と言うと、今度は「ニホンイイクニ、トッテモイイクニ、ダカラ、ジャパニーズ、チップ、チョットデイイカラ」とごちねなかったが日本語で言ってきた。あげたい気持ちは十分にあった。それは自分と同じくらいの子や、それより小さい子がねだってきたからだ。けれどその子たちの将来を考えると、あげたところでその子はこうやって生きていけると思いこみ、ずっとストリートチルドレンとして人生をおくるかもしれないと思ったからだ。心がしめつけられる感じがしてとても悲しかった。

その一方でネパールの人たちの笑顔がうれしかった。「ナマステ」と言うと、必ず笑顔で「ナマステ」と返してくれる。日本では何も知らない他の国の人に「コンニチハ」と言われ、「こんにちは」とかえせるだろうか。ましてや笑顔なんてほとんどの人がしないだろう。

（兵庫県篠山市/前川健太/中学生）

第4回パプア・ニューギニア8.20～8.31
勤当が解けて

村に戻れたラニーさん

ワンドカイ村にラニーさん（91年）を訪ねた。藤野さんと久しぶりの再会。藤野さんの顔を見るなりラニーさんは泣いてしまった。ラニーさんの帰国後の村での取り組みもなかなか大変らしい。村の人々の理解や参加を得ることは簡単なことではないことは察しがつく。そんなラニーさんの話をゲオリさんも一生懸命聞いていた。こうした日本からのスタディツアーは、普段はなかなか会えない帰国研修生同士が顔を合わせる機会になっている。



みんなで話を聞いたあと、ラニーさんと藤野さんは二人で長時間話しをしていた。プライベートな悩みや困難についての話ができるのも、研修生と丸々1年かかわってきたからでこそ。数週間から数ヶ月の短期の技術指導研修ではこうはいくまい！人と人との結び

つきが根底にあるのが、他とは違うPHDの研修事業だと思った。

（神戸市/石川照子/高校教員）

和田山の大森さ～ん（指導者）！ ハリエオベーカーリー好評です

早朝ハリエオさん（97年）は大鍋を抱えて私たちの泊まっている集会所に現れた。鍋の中身はまだ温かい焼きたてのパン！朝食にこれをいただき、私たちは絶賛。彼はこのパンを毎週土曜日に市で売っているそうだ。

彼の自宅を訪ねて驚いた。パンはオープンで焼くものとばかり思っていたら、ハリエオさんは台所の炉を使って、鍋で焼く。日本で研修したことはそのまま村で実行することは難しいはずなのに、自分たちの村で可能なように工夫してしまう。そんな知恵こそが大切なのだと感じた。

村での集会の時、村の人たちの前で話すハリエオさんはとても堂々としていて、村の人への影響力も大きいのではないかと思った。（同上）

村を良くする取り組みと 結婚の両立は難しい？

明日お別れということもあり、ゲオリさん（98年）と少し話しこんだ。彼女はとても真剣に、村の将来のことを考えている。「もうすぐしたら、村に道がつくのだ。そうすれば、もっと発展するだろう」とうれしそうに言った。「村が早く良くなるといいね」と私が言うと、「そうですね、でも、ゆっくり、ゆっくりね」と彼女は言った。彼女は仕事と引き換えに、自分の、女としての幸せを犠牲にしようとしている。女性は家を守るもの。そういう考えが支配的なPNGで、彼女を理解してくれる人を見つけるのは難しい。結婚して、自分の目標を失うことはどうしても避けたいようだ。彼女は「男はいらないね」と言い切った。理解ある伴侶が見つかることを願うばかりだ。

（松山市/大野千鈴/農業）

研修生レポート

帰国研修生短信

<ネパール>

・ラダさん (83年)

低カーストの女性を対象に編物や字の読み書きを教えています。



・サンバさん (83年)

ご子息と共に三日かけてカトマンズまで来てくれました。村で診療所を開き農業もしています。



・サビトリ・シュレスタさん (97年)

母親が体調を崩していたため、家の店を手伝いながら、海外NGOの医療調査の報告書作成のボランティアもしていました。最近母親の体調も回復し、またセーター作りにも参加できそうとのこと。



・サビトリ・バスターラさん (98年)

朝は学校で勉強を、昼間は近くに住む女性たちにセーター、カバン作りなどを教えています。わからない所はラダさんを訪ね聞いています。最近ミシンを購入し、今後は服も作っていききたいとのこと。



<タイ>

・ベリポーさん (99年)

帰国後結婚。ムシキの布のグループに日本で学んだ洋裁を教えています。



<インドネシア>

・アリさん (88年)

村の漁民の代表として郡や州の役人にかかっています。最近、知事と会い村に港を作る計画について協議。



アフダールさん

(インドネシア、31才)

—農業研修—

- 6. <神戸市西区> 渋谷富喜男
- 7. <佐用郡南光町> 真柴三幸
- 8. <氷上郡氷上町> 吉田吉彦
- 9. <愛媛県・丹原町> 西川則孝
- 10. <神戸市西区> 渋谷富喜男

(敬称略)

真柴さんは、PHDの研修先では数少ない専業酪農家です。アフダールさんの村では、牛乳を飲むことはありますが、牛は基本的に農作業用です。ただ、牝牛を飼っている人は、定期的に子牛を生まれ、ある程度育ててから肉用として売り、現金収入の足しにするそうです。そこで真柴さんからは、強い子牛にするためには生まれた後すぐに体液を乾かし外へ出すこと、初乳を通常の倍以上与えること等、出産や子牛の育て方に関するアドバイスを主に受けました。



初めての乳搾り

吉田さんのお宅では、稲刈りを体験しました。消費者の方々をはじめ、多くの方が援農に駆けつけてくれる様子を見て、生産者と消費者の理想的なつながり方の一例を感じることができました。

来日して半年が過ぎたアフダールさんには、今のところ日本の生活や農業は「バラ色」に映っているようです。そんなアフダールさんを見た西川さんご夫妻「物質的豊かさは精神的豊かさに裏打ちされてこそ良きものであることを伝えたいと思いますが、なかなか難しいことです。見かけの華やかさに眩惑されて、彼らが今持っている精神的な豊かさを失うことのないように願っています。」 PHDの思いも同じです。

◆ 18期生 ◆

ノバドンさん

(タイ、24才)

—農業研修—

- 6. <栄栗郡波賀町> 田中五郎
- 7. <氷上郡市島町> 一色作郎
- 8. <鳥取県・江府町> JA鳥取西部日野農機・自動車センター (滞在: 笹間政典)

8月下旬から1ヶ月弱の長期にわたり、田中さんのお宅で研修を受けました。水稲の収穫期だったので、稲刈り、乾燥、もみすり、出荷等の一連の作業を農機の使用法と合わせて研修することができました。ノバドンさんの村にはまだ耕耘機しか入っていないため、その他の農機に関しては将来役に立てば、ということでしたが、「農機の操作は大変上手で、操作法は十分に習得した」と田中さんからお墨付きをいただきました。また、たとえ機械を使用していても、例えば乾燥機の水分計による点検等を通じて、乾燥作業がとても微妙で難しいものだといった技術的なことを学ぶこともできました。



「農機の運転は楽しいです」

一色さんのお宅は2度目の訪問だったため、3週間弱リラックスしながらの研修になりました。1度目の研修時に種を播いたインゲンが、度初収穫の時期だったりと、各作物の大きな流れを掴むことができたことが良かったそうです。ただ、まだ言葉が十分でなく、ご面倒おかけしましたが、「色々な農作業を体験してもらったので、体で覚えた技術で生かせる事があれば、村に帰ってからもそれを思い出して頑張りたい」と激励して下さいました。

(2000.8月中旬～10月中旬)

ブンシーさん

(タイ、20才)

—洋裁・保健衛生・保育研修—

- (アレンジ、滞在先) 7. <三木市> 高橋武子 (芝美代子、吉田知子)
- 8. <芦屋市> 芦田安紀子
- 9. <神戸市北区> 鴻谷美江子
- 10. <神崎郡市川町> 市川町立瀬加保育園 (牛尾武博、小田真智子、廣畑千栄)
- 11. <三木市> 兵庫三木保健所、三木市総合保健センター (芝美代子、吉田知子)
- 12. <鳥根県・西ノ島町> 西ノ島町家族会共同作業所「ごさいな」、シオン保育所 (佐倉真喜子) / <鳥根県・東出雲町> 揖屋幼稚園、東出雲町役場保健福祉課 (米田祝子、金本勉・すみ子)
- 13. <氷上郡春日町> 臼井由江 (春日町国際交流協会 臼井澄雄、足立洋子、荻野澄香)

ブンシーさんの研修の中心である洋裁研修では、彼女の知識やセンスの幅を広げようと編物、パッチワーク、刺繍など様々なジャンルのものに取り組んできました。それぞれの特徴をうまく組み合わせることによって、伝統的なカレンの布の良さを引き立たせるデザインが出来るのではないかと、現在、試行錯誤中。また、誰に、どこで、どのように売っていくのか等、商品化するにあたってのポイントについても、指導者の方々を含めて一緒に頭を悩ませているところです。



お年寄りとの交流

保健衛生・保育研修では、例えば、食品を6つのグループに分類したモデルを通じて、栄養のバランスの取り方について学びました。そして、砂糖、塩、化学調味料等、食べ過ぎると体に悪いものに対する理解も深めました。障害を持った方やお年寄り対象のプログラムに参加してみて、「進んでいるなー」と感じる反面、「タイの村では家族が家で面倒をみます。老人ホームのお年寄りは少し寂しそうですね」と感想を述べていました。

リンダさん

(バブア・ニューギニア、22才)

—洋裁・保健衛生・保育研修—

- (アレンジ、滞在先) 6. <明石市> 足立則子
 - 7. <西宮市> はらっぱ保育所 (前田公美)
 - 8. <鳥取県・三朝町> 三朝町役場企画課・町民課 (藤山泰英、青木大雄、藤井克孝)
- ※9月下旬～10月上旬は体調を崩したため研修はお休みしました。

8月中旬の3日間、明石市の足立さんのお宅に通い、洋裁の研修を行いました。それまでに何回か洋裁研修を受けていたリンダさんの目標は、型紙作りに始まる一連のブラウス作りを一人でできるようになることでした。「わからない所はしっかりと聞いて、ノートに書き止めていました。あの調子だとPNGに帰っても出来る様になると思います」と足立さん。その後も、PHDの事務所で、ワンピースなどを一人で作り、学んだことを完全に身につけようとがんばっています。

次に訪れた「はらっぱ保育所」では、子どもたちの食事の材料に、出来る限り有機農産物を使っていることに感心していました。また、保育所の外に出る散歩が多く、子どもたちが元気一杯に過ごしていることも印象的だったようです。



ワンピースの型紙を前にして

三朝町では、100才を超えるおじいさん、おばあさんを訪問したり、離乳食に関する話を聞かせていただいたりしました。お医者さんや保健婦さんによる様々なプログラムがあることをうらやましく思い、「自分の村に帰ったら、少しずつでもこういったことを始めていきたい」と話しています。

第10回 日韓農民交流

- ホン スンミョン 男 プルムー農業高校長(通訳)
- クオン テオ 男 農業(稲作、果樹)
- イ ジェウク 男 農業(稲作、野菜)
- キム オクヒ 女 八堂有機農業本部職員
- アン ジョンスン 女 農業(稲作、野菜)
- チョン ミンギョル 男 プルムー農業高校教員

<スケジュール>

- 1. 保田茂(神大農学部教授)～2. 淡路島モンキーセンター～3. 山口勝弘(南淡町)～4. 夢広場(洲本市)～5. コープこうべフードプランチーム～6. 一色作郎(市島町)～7. 中野宗嗣(春日町)～8. 春日町国際交流協会～9. 松尾誠(篠山市)～10. コープ土づくりセンター、みずほ協同農園～11. ふえろう村塾～12. 植田劭(京都精華大教授)～13. 食品公害を追放し安全な食べ物を求める会、信長たか子(宝塚市)～14. 全国愛農会(三重県青山町)



一色さんの畑を見る

今年も韓国から6名の有機農業関係者を招き、研修や交流会等を行いました。レポートの一部を紹介します。

韓国の有機農業生産者グループ「正農会」の組織局長である李さん「「私たちが会ったほとんどの人は私たちに何かを教えようという姿勢ではありませんでした。自分たちのやっていることを見せてくれる一方で、私たちの事情を聞き、有機農業をお互いどのように展開していくべきなのかをともに探ろうとする真摯な姿勢を見せて下さったのです。」

新規就農されて8年目の安さん「「私の家族はお金で支配する現在の誤った現実から可能な限り少しでも抜け出そうという生活に変えました。21世紀には有機農業の重要性が強調されるだろうという植田先生のお言葉は、私たちの選択を勇気付けてくれるものでした。」

今回の見学、交流にご協力下さった皆様、誠にありがとうございました。

夏のスタディツアー報告パート2

第14回インドネシア9.14～9.19

まずは自分の村の良さに

気づくための日本の研修に

タベ村は中山間地である。棚田が山の中腹にまで続いている。大きな水田の法面と思われる所にも小さな田んぼが点々とくっついている。この村の人達のたくましさを感じられる。水利の悪い田は干上がっている。今すぐにも雨が降らないと稲がだめになりそうだ。川の水が取れるところは、水がたっぷり入って代掻きをしている田もある。

稲の株間は狭いし、一株の根付き本数も多過ぎる気がする。分けつの少ない稲なのかも知れないが、もう少し少なく植えても良いのではないかと思った。

タベ2日目は来年の研修生の選考である。時間と労力のかかる大変な仕事だということがわかる。選考の合間に、念願のダスウィルさんの畑を案内してもらうことができた。さとうきびのしぼりかすで堆肥を作っている。日本で学んだことをしっかりと実践している。彼が日本で話していた様な工夫も取り入れているようだ。畑へは日本であれば軽トラックか一輪車で運ぶであろうけれど、彼は頭の上のせて細いあぜ道を何

回も運んだらしい。

堆肥を入れたとうがらし畑は土が軟らかくなっていた。この努力を続ければ、粘土質のこの畑の土も改善されると思う。今回は少し未熟の堆肥を入れたのか、根腐れをおこしているところがあったのは残念だ。



野菜の畑はわずかで、主役はさとうきび畑のようだが、この村の条件ではその方が良いのだろう。田畑のあぜの草がきれいに刈られているのは見事である。牛、馬がいて毎日草を刈って食べさせているからであろう。

PHDの研修生はいつも「私の村は貧しいです」と言う。確かにクルマもトラクターもない。労働は厳しいかもしれない。しかし、ここには私たちが遠い昔に忘れてしまったものがある。お金では得られない豊かさかもしれない。

私は、研修生が日本に来て、自分の村の良さを見直すきっかけになってほしいと思っている。その上で、新し

い村づくり、新しい農業に取り組んでもらいたいという願いがある。今回その思いを強くすることができた。(神戸市/渋谷富喜男/農業)

女がかわれば.....

漁村パシルブルーに泊まった。夜、ツアー参加者と研修生4人が集まって話し合いがもたれた。その中でハスマヤニさん(92年)が「村の外を見ないで満足し、不満も活気もない女性たちの意識を変えたい」と訴えていた。女がかわれば村が変わると思う。頑張してほしい。

(新潟県糸魚川市/森チエ子/病院勤務)

モノの変化はすぐ見えるけど

ヒトは続けないと

夜、パシルブルー村で、私がお世話したセニフィタさん(92年)、ラッドさん(94年)を含めて5人の研修生と意見交換をした。8時すぎに始まり、気がつく時計の針は11時近くになっていた。研修生は年齢も若いので時間はかかるが、住民の声をすいあげながら各々の力を伸ばし、時にはグループで前に進んでいけばいろいろ可能性が潜んでいるように思えた。またこのスタディツアーが毎年継続されている意義の深さを感じた。

(島根県西ノ島町/佐倉真喜子)

多くの人は「生存競争」と「後ろ向き」の間あたりにいて、いつも「他人に勝たなきゃ」と急ぎ立てられたり、「どうせ私には無理だから」などとあきらめたりと、マイナス思考になりがちです。それを繰り返すうちに、社会や他人との関係が無意味に思え、孤独感が増し、自暴自棄になって自分や他人に破壊的な行動を取る方向に行きかねない。これは、特定の国や個人に限らず、社会を構成する人間一人一人の大切な問題です。

今の状態に問題があり、何かを変えようとする時、お金やモノ、技術や知識だけではなく、どんな姿勢で取り組んでいくのか、その原点について考えるワークショップでした。

(本プログラムは兵庫県国際交流協会、神戸市国際協力交流センター、頌栄人間福祉専門学校の協力で実施しました。)

PHDで学ぶ人、続々!

この秋、教育委員会からの依頼を受け長期社会体験研修として先生が、また2人の学生が実習にやってきました。続いては「トライやるウィーク」で中学生3人がやります。

■現職教員として、2ヶ月間PHD協会で研修を行う中で、学校とNGOとの連携について考えてみました。

NGOは自らの活動を構成する一要素として「開発教育」を生み出し、この分野では学校に比べ一日の長があります。また、その活動の性格上、海外の活動地域や研修生出身地に関する多くの資料を持っています。そのため、学校との連携は「異文化理解教育」や「開発教育」の分野で始まり、出前授業も行われるようになってきました。「総合的な学習」が行われるようになると、この傾向はさらに強まると思われます。

しかし、これまでの出前授業は1～2時間NGOが学校に出向き、手持ちの教材を使い授業を行なっておしまいというのが多かったようです。これではNGOの側は「学校に行っ授業を行なえば期待している何かが生まれるのではないか」、学校側も「NGOに授業を行なってもらえば何かが生まれるのではないか」、との希望的観測のもとで授業が行なわれたに過ぎません。

出前授業を行うためには、それが例え1～2時間の授業であっても、その内容の打合せやふりかえりはもちろん、出前授業を含む全体のカリ

キュラムをNGO、学校とも作り、それをつき合わせる作業を行うか、相談してカリキュラムを作るかが必要になってきていると思います。学校側の「お任せ授業」やNGO側の「要望お答え授業」ではなく、カリキュラム作りからの連携が必要ではないでしょうか。そうすることによって、お互いの持ち味を活かした授業が生まれるのではないかと思います。

(神戸市/齋藤明裕/中学校教員)

■9月25日から1週間、インターン生としてPHDに通いました。以前から日本語ボランティアなどで来ていましたが、続けて来るのは初めて。「皆さんいつも忙しそうだなあ」と思っていました。月曜日のミーティングで、皆さんの1週間の予定を聞いてビックリ。夜行フェリーで四国へ行き、とんぼ帰りをするなど、職員の皆さんが事務局にそろったのは1週間でたった1日でした。

今まで、外から見ていただけでしたが、実際に入っているいろいろなささしていただけ(おじゃましていたともいうかも...)ことにより、PHDについてより深く知ることが出来ました。1週間続けて来ることによりPHDをより身近に感じる事ができ

ました。そして、続けることの大切さ、働くことの難しさを実感しました。笑いのたえない1週間。あっという間に終わってしまい心残りですが、また続けて来たいです。

(茨木市/山本久美子/関西国際大学3年生)

■12月までPHD協会でインターン中です。ボランティアの方々やアジアからの研修生に多く出会えるのが楽しみの一つでもあります。私は会社を退職し、現在は専門学校で一から国際関係開発を学んでいます。

国際協力などはNGOのような世界に入り込まないとできないと思っていたので、藤野さんの「自分のいるその場所から働きかける事が大切だ」というお話が、大変印象に残っています。

国際協力・理解について、知れば知るほど、世の中や自分自身の矛盾に気づかされ、辛くなる時もあります。しかし、まず自分から何か動きださなければ、世界は少しも変化していかないのだと分かりました。

将来については、まだ模索中ですが、これからどのような環境の中に入ったとしても、国際協力に関わっていきたいと思っています。

(西宮市/藤本尚子/大阪YWCA専門学校)

ワークショップ「地域社会で働くこととは」

PHD協会ではここ数年、アジア・南太平洋地域の人たちへの研修だけでなく、日本でも地域の課題に取り組む人材を育てるためにプログラムを開催してきました。98年のローレンス先生、99年のポール先生に続き、今年インドから人材トレーニングNGO、THREAD (Team for Human Resource Education & Action for Development)の代表、ジョン・ジョージ先生をお招きして、9月末から10月上旬にかけて複数のプログラムを開催しました。

今回は、神戸で開催したNGO職員、ボランティア対象のOne day Workshopから報告します。



私たちは日常生活でどんな気持ちでいることが多いのでしょうか?一つの事柄に対しても、その時の気持ち次第で前向きに行動できる時もあれば、後ろ向きになってしまうこともあります。気持ちによって様々な事柄への対処が変わるのです。それは、他人や社会に対して働きかける時にも同様です。

日々の出来事にどう考え、どう対処をするのか?

ジョン先生は人間の気持ちを「破壊的-後ろ向き-一勝つか負けるかの生存競争-建設的-一創造的」と5つの状態(mode)に分類しました。

大切なことは、どの状態にあるから良い悪いではなくて、自分がどの状態にいるのかを把握することです。そこから初めて変化が可能になるからです。

PHD NEWS

□会費・ご寄附寄託状況

2000年8月	132件	1,953,140円
9月	97件	1,486,252円
	229件	3,439,392円

以上の通り皆様より多くの会費とご寄附を頂戴しました。皆様のご協力に厚くお礼申し上げます。

□組合員の皆さん、ありがとう

11月7日、自動車総連(草野忠義会長)より今年も愛の福祉カンパを頂戴することができました。東京都港区で行われた贈呈式には今井理事長が出席し、会場の組合委員の方々にお礼と報告を申し上げます。

□西日本をまわります

社会学習とリーダーシップトレーニングを兼ねた研修旅行を下記の予定で行います。研修生との交流会も各地で予定しております。詳しくは、お問い合わせ下さい。

日程:2001年1月16日～31日
(調整中)

予定コース:鹿児島～熊本～大分～福岡～山口～広島～愛媛～香川～岡山

□新しいカレンの布と加工品が

事務所にやってきました。年末のタイスタディツアーで、カレンの布を買いつけます。年明けには新しい布と帰国研修生が取り組んだ加工品が揃います。ぜひ見に来て下さい。イベントも企画中です。

□ホストファミリー募集

来年4月に来日する19期生4名の滞在家庭を募集します。

期間:2001年4月から1年間。始めの6週間は毎日、以降月平均7日程度。

場所:神戸三宮まで1時間程度で通える範囲。

経費:当会規定の食費、滞在費をお支払いします。

2001年度研修生

- ・ナロンデッ・クナパナドンさん (タイ/19才/男性)
- ・ケューン・カヨータさん (タイ/28才/男性)
- ・シコン・ドンさん (パプアニューギニア/21才/女性)
- ・アルウィ・ファドリさん (インドネシア/27才/男性)

〇月×日のPHD協会

職員 藤野 日本文化の紹介とインドのジョン氏を連れ回転寿司に。が、氏はベジタリアン。イナリやカッパ巻でしのぐ、まさしく苦肉の策。

職員 伊藤 事務作業効率化のためコンピュータ整備を着々と進める。が、某日、強力悪玉ウィルス侵入によりその対応で、3日間四苦八苦。

職員 山西 研修生と兵庫県内各地のロータリークラブ例会を訪問。回を重ねるごとに研修生のスピーチが上達し、私の出番は少なくなる。

職員 納堂 研修先の交流会でアブダールさんに続いて挨拶。地元のお年寄りが「あんた、日本語じょうずだねえ」と一言。26年の成果ここに。

職員 古本 ボランティアのN沢さんとお昼を食べに。万万が一出していた

だくことになったらと、一番安いのに。それが正解、ごちそうさま。

職員 芳田 電話番号を尋ねられ、すばやい対応で番号を読み上げるもつながらない。よくよく見れば、そいつは郵便番号。最近、時々ある話。

PHDでの職員歴の長い順
(同順の場合は研修歴・ボランティア歴を考慮)

編集協力：齋藤明裕、原野紀久、
山本久美子、篠原登子

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載しておりません。